

編集後記

従来、われわれの紀要『文化と言語』には編集後記がなかったのであるが、今号から載せることにした。編集に当たっての方針、提言、(裏話でさえも!)などを述べることは意味あることであり、また、編集者としての責任を明らかにすることにもなると考えるからである。

『文化と言語』は年2回発行するのが建前になっているが、ここ数年思うように原稿が集まらず、年1回の発行がやっとという実状である。このことは決して外国語学部の教員の不勉強を意味するものではない。それどころか、筆者の目から見ても、わが同僚たちは教育に研究に実に涙ぐましいほど精励しているのである。

外国語学部の教員数は他学部のそれにくらべて著しく少ないにもかかわらず、各種委員会委員をはじめとする校務分担量が他学部と同一に課せられているため、ひとり平均3つほどの委員や校務分掌を兼ねているのである。その上、授業時数の多いこともまた大きな負担になっている。そのため、未整理のノートの蓄積量はいたずらに増大するばかりで、それを論文に仕上げる時間的もしくは精神的な余裕がないのである。

そこでひとつ提案したい。紀要である以上、研究論文を主軸に据えるのはもちろんであるが、あまりにしかつめらしく構えず、研究ノート、翻訳、書物や論文の批評・紹介などの原稿をお寄せくださってはいかがであろうか。こういったものが下手な論文(失礼!)以上に示唆的、啓発的でありうることは、今さら喋々する必要があるまいと思われる。

1988年2月

編集委員 菅 沼 慶 一